長野市の埋蔵文化財　第33集

長野市　塩崎

鶴前(つるまえ)遺跡・塩崎(しおざき)城跡

——中部電力㈱送電用鉄塔建設に伴う発掘調査報告書——

1989.3

長野市教育委員会

序

昭和63年度は、長野市において中央自動車道長野線の工事着工等にみられるように高速交通網整備の年といえましょう。この事業に伴う本線内における埋蔵文化財の発掘調査も順調に進み、鶴前遺跡や石川条里遺跡で重要な遺構・遺物の発見があったと聞いております。

長野市埋蔵文化財センターにおきましても、中央自動車道建設に関連する事業が序々に増えてまいり、その保護のため鋭意努力しているところであります。

今回、ここに長野市埋蔵文化財第33集として刊行いたしました鶴前遺跡もこの建設事業に伴う発掘調査報告書であります。中部電力株式会社による高圧線鉄塔の移設に起因するもので、その調査範囲は狭く、遺跡のほんの一部を検出したにすぎません。合せて塩崎城山麓部の調査もこれと同じでありますが、遺跡の範囲及び性格を推定する上で成果のあったものと考えております。石川条里遺跡やそれを取り巻く遺跡群解明の一助として本書をご利用いただければ幸甚に存じます。

発掘調査から本書刊行に至るまでご援助をいただいた中部電力株式会社長野支店の皆様、炎天下発掘作業のお手伝いをいただいた皆様をはじめ関係者の方々には末筆ながらお礼申し上げます。

平成元年３月

長野市教育委員会教育長　奥　村　秀　雄

例　　言

1．本編は坂北、北信線中部電力鉄塔建設事業に伴う昭和63年10月３日至同年10月５日に実施した長野市篠ノ井塩崎字白助881－7（他）所在の塩崎城跡、及び昭和63年10月６日至同年10月18日に実施した長野市篠ノ井塩崎字鶴前1593－3所在の鶴前遺跡緊急発掘調査報告書である。

2．本調査は中部電力㈱と長野市教育委員会の協議に基づき、中部電力の委託を受けて長野市埋蔵文化財センターが、調査及び報告書作成等を実施した。

3．調査は、矢口の指導に基づき、塩崎城跡発掘調査に青木が、鶴前遺跡発掘調査において千野が担当し、記録は各調査員が分担した。

4．本書作成における作業分担は下記のとおりである。

遺跡・遺物図整理、浄書－清水

写真－千野、青木

編集－清水

本書の執筆は、第１章１節、第４章を青木が、第１章第２節、第３章を清水が記した。

また、第２章１、２節は和田博氏（長野市立博物館専門主事）に玉稿を頂いた。記して、ご厚情に感謝致します。

5．遺構図は１:60を基本とし、微細図に関しては１:30とした。また、遺物実測図及び遺物拓影は１:３に統一した。

6．本文及び遺構実測図中の遺構名を略記した。住居址（ＳＢ）、土壙（SK）等である。また、本遺跡名も地名の頭文字をとって、ＳＳＴと略称することとした。

7．調査の諸記録及び、出土遺物は長野市埋蔵文化財センターで保管するが、将来的には長野市立博物館に移管される。

目　次

序
例言
第1章　調査に至る経過
第1節　坂北・北信線鉄塔建築事業 …… 1
第2節　調査の体制 …… 2
第2章　遺跡周辺の環境
第1節　地理的環境 …… 3
第2節　歴史的環境 …… 4
第3章　鶴前遺跡
第1節　遺跡の位置と周辺の地形 …… 7
第2節　発掘調査の方法 …… 7
第3節　調査日誌 …… 8
第4節　遺構の分布 …… 10
第5節　調査内容 …… 10
1号住居址　1号土壙
第6節　小結 …… 15
第4章　塩崎城跡

挿図目次

図1　遺跡周辺の地形と調査地（1：10000）
図2　鶴前遺跡－調査地周辺の地形①（1：2500）
図3　調査位置図及び周辺図（1：200）
図4　1号住居址実測図
図5　1号住居址出土土器実測図・拓影
図6　1号土壙実測図
図7　1号土壙出土土器実測図
図8　塩崎城跡－調査地周辺の地形②（1：6000）
図9　調査区全測図（1：200）

表目次

表1　鶴前遺跡－1号住居址出土土器観察表
表2　1号土壙出土土器観察表

図版目次

図版1　鶴前遺跡－調査地周辺の景観　調査地近景　第1号住居址
図版2　第1号住居内土壙　第1号土壙　第1号土壙遺物出土状況
図版3　塩崎城跡－調査地点遠景　調査地点近景　塩崎新城遠望
図版4　測量・検出作業スナップ　トレンチ内検出状況
図版5　試掘調査－調査スナップ　鶴前遺跡出土遺物

第１章　調査に至る経過

第１節　坂北・北信線鉄塔建設事業

長野市篠ノ井塩崎地区においては、高速道路「長野自動車道」建設に関連した各種土木工事が急増している。中部電力株式会社が実施する高速道路建設予定地内の送電線鉄塔の移築や、それに付帯した送電線ルート変更などの建設事業もその一つに数えられる。当該地区に既存の送電線「坂北・北信線」は、高速道路建設にともない大幅に路線を変更することとなり、同建設事業により周知の遺跡内での発掘届が提出されるに至った。昭和63年９月２日、長野県教育委員会文化課・長野市教育委員会埋蔵文化財センター・中部電力株式会社長野支店の３者において、建設事業にかかわる塩崎城跡・鶴前遺跡・石川条里遺跡の３遺跡に関する保護協議が実施され、次のとおり保護策が決定された。

塩崎城跡

城跡最下段にあたると推定される位置での鉄塔新設工事について、地形測量を含めた発掘調査を実施し、記録保存をはかる。

鶴前遺跡

既設鉄塔位置での建替工事について、試掘調査により遺構の遺存状態を確認し、その結果をまって保護措置を判断する。

石川条里遺跡

既設鉄塔位置での建替工事について、近接部分での発掘調査所見から水田遺構の存在がほぼ確実であるが、既設鉄塔工事により破壊された部分が大きいものと判断されるため、施工に際しての立ち会いにより記録保存をはかる。

なお、記録保存のための発掘調査の実施については、中部電力株式会社長野支店の委託により長野市教育委員会が担当することとなった。

鶴前遺跡に関しての試掘調査は、９月28日に着手された塩崎城跡の発掘調査終了後に継続して実施され、試掘調査の結果、既設鉄塔による破壊部分以外に、遺構の存在が確認されたため、急遽発掘調査へと移行させ記録保存をはかることが決定された。

また、鉄塔建設事業にともなう仮配線のための仮設鉄塔設置が、鶴前遺跡・石川条里遺跡内で６か所に計画されたため、同部分に関しての保護措置として、施工に際して立ち会いにより記録保存をはかることが決定された。

なお、石川条里遺跡での調査とともに、鉄塔建設事業に付帯する仮設鉄塔工事にともなう立ち会い調査に関しては、３月現在継続中であり、機会をあらためて報告することとする。

第2節　調査の体制

長野市埋蔵文化財センターは市内に所在する埋蔵文化財等の遺跡発掘調査の調整企画、それに基づく調査、保存、活用及び研究を行い、文化財の保護を図るとともに、広く一般に文化財保護の普及啓発に努め、また文化の発展に寄与するよう心懸けている。

それら趣旨に則り、今次の発掘調査もその一環として、両遺跡調査団を編成して調査を実施した。以下、今回の調査業務分担を下記に記す。

調査主体者　奥村　秀雄（長野市教育委員会教育長）
総括責任者　諏訪部和彦（長野市埋蔵文化財センター所長）
庶務・経理　小山　正（〃　〃　所長補佐）
〃　青木　厚子（〃　〃　職員）
調査係　矢口　忠良（〃　〃　調査係長）
〃　青木　和明（〃　〃　主事）
〃　千野　浩（〃　〃　〃）
〃　小松　安和（〃　〃　専門主事）
〃　中沢　克三（〃　〃　〃）
〃　大室　昂（〃　〃　〃）
〃　中殿　章子（〃　〃　専門員）
〃　横山かよ子（〃　〃　〃）
調査員　清水　隆寿
調査作業員　橋爪　孝次　柄沢　清志　神頭　幸雄
整理作業員　岡沢　治子　徳成奈於子

発掘調査は、両遺跡の発掘日時が連続していたこともあって、作業員の方々には継続して御足労を願うことになった。また、中部電力株式会社長野支店においては、本書刊行に至るまで格段の御配意をいただいた。関係者各位に対し衷心より御礼申し上げます。

第２章　遺跡周辺の環境

第１節　地理的環境

上田境の岩鼻から約13kmの坂城広谷と呼ばれる地域は東北信を結ぶ動脈となり、ここ塩崎・屋代付近を接譲地域として長野盆地に移行し、古来から交通の要衝をなしている。

佐久上小地域の水を集めた千曲川はこの広谷を西北に貫流し、塩崎沖積地に突き当たりほぼ直角方向に流路を変えて長野盆地を河東山脚寄りに東北流する。

坂城広谷で斜度230分の１の千曲川急流は、至る所に広い砂洲を形成し、あるいは激流となって乱流する。延喜式神名帳に名神大社と記された武水別神社はその川鎮めとして千曲河畔に勧請されたと伝える。上流から運ばれたおびだたしい土砂は流路方向を変えるこの付近左岸の攻撃面を主としてこの下流河岸に堆積し、比高差約２mにも及ぶ典型的な自然堤防を構成。その背後、山地との間は広大な湿地帯となっている。

この背後湿地も山間地域から流下する聖川を始めとする小河川の土砂流入によって、自然堤防との比高差は現在観察されないほどに隆起しているが、昔から長野盆地で最も田植の遅い穀倉地域であることに変わりない。

西を限る篠山（△907.07)山塊は地塊（block）やテラス（terrace）の多い特異な山容をもって塩崎沖積地にのしかかるようにそばだつ。

篠山から鳥坂峠（△515）に至る篠山山塊は、聖山（△1447.6）が東北へ延びて高雄山(△1166.4)を経た先端一帯を構成し、薬師山（△565.8）へと次第に高度を下げると共に傾動地形（tiltedblock）を示し、緩傾斜の西側に対し東斜面は断層を伴う階段状の平均20度以上から30度近い急傾斜をなす。この山系は聖山を始め、高雄、篠山山塊から薬師山に至るまで尾根を中心に第三紀鮮新世初頭以降前期更新世初頭に至る間の噴出時期を異にした数種の新旧安山岩が分布し、その北端は信里地区の有旅附近まで達している。

猪平とその近傍小坂山（△660.8） から鳥坂峠山腹にかけて安山岩地帯より低い山地は下部流紋岩質疑灰岩（裾花凝灰岩）で、篠山山塊などの基盤をなしている。この地層は冠着山から東北へ走り三登山に至る長野盆地西縁に延々と連続する中新世後期の海底火山噴出による堆積で、安茂里などで白岩と呼ばれると同様、白助・北白助の地名も白助・黒助の口碑伝承も裾花凝灰岩の白色と暗黒色の安山岩との対比に起因していると考えられる。

浸食を受け易いこの裾花凝灰岩層は、断層の所在も相俟って急峻な谷沢を中腹以下に刻み、崩落した土砂は沖積地に流出したり、山麓に崖錐（talus）を形成して堆積する。鶴前や鶴萩は沼沢近傍を意味しこの地域の崖錐を言い得て妙とされ、四野宮や鳥坂の一部に洪積世湖盆の堆積も

ある。鶴前遺跡は北白助地籍と沖積地との間に形成された崖錐中央部で沖積地から約20mほど上がった地点で、周囲は果樹園に囲まれ遺跡近くに僅かながら伏流の湧出も見られる。

崖錐の地目は鶴前遺跡同様果樹園がほとんどを占めているが、湧水地帯となる崖錐下部を中心にして越・長谷・鳥坂・四野宮などの集落が発達し、それら諸集落を山麓道が貫き、自然堤防上と共に古来からの主要道路をなし、古代の東山道支道にも比定される。

山腹の谷沢に切られた数条の尾根には、上下2段の段丘状地形が前述のように指摘される。上段はほぼ550m等高線沿い、下段は500～450mに存在するこれらは、いずれも断層によってできた ケルンバット（kern butt）で、それぞれの直上は地図上でも等高線が密で断層を物語る。滝ノ 入・滝頭の地籍名もその地形を示している。

伊那谷で「ぬすっと道」と呼ばれた鞍部（kern col）もこのケルンバットの大部分に附随し、越将軍塚の「のっこし」はその典型で現在も山道が明瞭であり、越の地名起源もそこに求められる。

塩崎城（古城）跡はこのような白助尾根上部の560m閉鎖曲線高地を中心に所在し、先端の滑面 （slicknside）も存在する断層末端面（terminal facet）は他の尾根と同様に解析が進み、下方末端部は南北2筋の尾根に分岐する。その南側長谷寺裏のケルンバットに塩崎城の一部とも言われた白助調査地点があり、獣道にも似た送電線巡視路が30° 以上もある断層末端面を横切り、鉄塔のあるこのテラス鞍部を越えて南側の沢筋に下っている。

110mの比高差は眺望絶佳。眼下の塩崎自然堤防を隔てて正面は更埴市の森将軍塚古墳が一重山城跡に重なる。石川条里前方の篠ノ井市街や大当は意外に遠く、右山際突端の塩崎新城跡・越将軍塚が指呼の間。坂城広谷を流れ落ちる千曲川は白く光りやがて一条になって左奥に消えるあたりに松代・若穂の扇状地がかすみ、知具麻能左射礼思や中麻奈尓の信濃古歌をしのばせる。

第2節　歴史的環境

この地域に印された人々の足跡は古くまた大きい。中郷神社前の宮前遺跡やそこから沖積地に伸びる舌状微高地などに縄文文化の痕跡も見られるが、塩崎自然堤防は北信に初めて稲作文化が伝播し定着した弥生波及期文化が特筆されると共に、方形周溝墓その他それ以降各期を包括した大遺跡地帯を構成する。また最近では後背湿地やその中の微高地から数多くの木製品を始めさまざまな農耕遺物や痕跡などが検出されて来ている。

地域南限稲荷山との境界に竪穴式石室を有する越将軍塚古墳があり、森・川柳両将軍塚古墳に次ぐ中期と見られている中郷神社前方後円墳は、薬師山東麓の四野宮に茂る松林中に築造されている。これらを中核として池ノ上古墳群や鶴荻古墳など横穴式石室の円墳が数多く散在し、中に

第1図　遺跡周辺の地形と調査地（1：10000）

薬師山頂上にも数基存在する。

古代はここ一帯も小谷（おうな）郷の一部であったとされ、平久保は日置部の転訛との見方もある。白助調査点南山下の杉林中に長谷神社があり延喜式神名帳所載とされ、一説には中郷神社が式内社とも言われ、長谷の地名は武烈天皇御子代の小長谷部に由来し、姨捨の語源ともなっているとか。

荘園時代に下ると、佐野川流域の小谷庄と犀川以北の石川庄とに挟まれたこの地域には勅旨による四野宮庄が成立し、平安後期から南北朝ごろまでを通じて仁和寺領であった。

白助翁伝承をもつ長谷寺は白助下部テラスの直下にあり、承和５年（838）現在地へ移転の寺伝を有し、裏山から仁平元年（1151）在銘の金銅経筒が出土している。

鎌倉末期の地頭職は金沢顕時、北条滅亡後は諏訪円忠となり、当時の庄域は41町９反在家35宇でその中に長谷寺田２反鎮守神田１町２反三林薬師田２反等も含まれ、このうち28町５反在家25宇が貞和２年（1346）に天竜寺に寄進されている。

これより前、建武２年（1335）四宮太郎左衛門を主将とした諏訪神党が舟山守護所を襲い、市河助房の参陣を得た小笠原貞宗が村上信貞と共にそれを篠ノ井・四宮河原などで破ったのが中先代の乱の一環であった。四宮庄を得た貞宗は半分を同族の赤沢経興に分与、赤沢は塩崎城（古城）を要害とした。

応永７年（1400）大塔合戦の際、大文字一揆らの東北信勢に包囲された新守護小笠原長秀は夜陰に横田城脱出を図ったものの、塩崎城には僅か本隊の150騎のみたどりつき、後続300余騎は猛攻にはばまれて大塔古要害に遁入し籠城二旬余の末全滅。塩崎城も落城旦夕に迫ったと大塔物語は伝える。

その後、村上領となり塩崎新城築造も見、赤沢の復活もあったが応仁・文明（1467～87）ごろ桑原がとってかわり塩崎の在地名を称し村上配下となった。天文22年（1553）屋代と共に武田信玄に出仕、その年及び永禄７年（1564）にはこの附近で武田上杉の対決も見られた。

養和１年（1181）木曽義仲が横田河原に平家方の城資職を破って以来、あまりにしばしば戦火の地と化したのも、ここ接壌地域が東北中信を結ぶ要点であるからにほかならない。

近世に至り、2812石余の村高を有する塩崎村は、当初95年間が上田領飛地、13年間の天領期を過ぎた後は幕末まで上田藩分家の旗本松平領となった。

第３章　鶴前遺跡

第１節　遺跡の位置と周辺の地形

周囲を峻険な山並みに囲繞される長野盆地は、千曲川中流に展開する沖積による平坦地にあって、広く市民に善光寺平と親しまれている。調査地はその南部に位置し、肥沃な水田地帯を俯瞰する丘陵上に位置する。遺跡の東南1.2kmには篠ノ井線稲荷山駅が、北東約４kmの地点には信越・中央本線の分岐点の篠ノ井駅となり、また近年中央道長野線の建設着工の運びとなり、俄に彼の地が古代において東山道支道として、中世には戦略的要地、かつ又西国・東国への交通の要衝であったことを彷彿とさせる。

鶴前遺跡は聖川末端に発達する扇状地と蛇行を繰返しながら北流する千曲川に挟まれて潤された石川条里水田に比高差25mをもって正面に臨み、篠山丘陵端部の標高380m前後の緩斜面に立地する。背後には急峻な山塊という地貌を呈している。

遺跡の立地する段丘上平坦部を構成する地層は、基本的に五層に分層が可能であり、上部表土層から暗茶褐色土層、黄黒褐色土層、暗橙褐色土層、暗茶褐色土層、そして地山を構成する凝灰岩質ブロックの混入する黄茶褐色土層となっている。砂礫を含まない良質な堆積状況を示し、現在林檎栽培を主とした畑地として利用されている。

第２節　発掘調査の方法

鶴前遺跡群内に所在する中部電力の送電用鉄塔建変え実施に先立って行われた試掘調査、その結果対象地内に遺構が検出され、本調査が昭和63年10月７日を期して開始された。

試掘調査は、域内の任意の地点に、長さ３m、幅１mのトレンチを二ケ所設定し、Ａトレンチより住居址と思われる遺構が確認され、発掘調査による記録保存の必要性を鑑み、人力を用いて表土掘り下げに入るとともに、漸次全域に試掘坑を入れ、その結果を踏まえて調査範囲を設定することとした。

当該調査に於ける調査対象面積は、新たに拡張される鉄塔面積（13×13m四方）から、既存の鉄塔構築の際に攪乱を受けている面積（８×８m四方）を省いたものに相当し、凡そ105m²を測る。その内実際の調査面積は、一部住居隅等に関して拡幅して発掘調査を実施した面積を加味すると、実質面積は約41m²、対象調査面積の４割を占めることとなった。

遺物包含層及び遺構検出作業の際に出土した遺物については「検出面出土遺物」として採取し

遺構検出の後、覆土内出土の遺物は覆土上位、中位、床面直上等出土位置毎に一括して採取した。遺構内遺物のうち主要なものに関しては写真撮影の後、測量により位置、レベル等を記録した。写真撮影は各遺構ごとに遺物検出状況、掘り上がり状況、遺構内細部について実施した。

検出された遺構の測量は標高、南北軸ＢＭを基準に２ｍメッシュを組み、遣り方測量を実施し基本的に１：20、また詳細を必要とするものに関しては１：10の縮尺で行った。

第３節　調査日誌

昭和63年（1988年）

10月７日（金）

試掘調査　先ず、鉄塔拡張範囲における遺跡確認の為、鉄塔西側にＡトレンチ（３×１ｍ）、北東側にＢトレンチ（３×１ｍ）を設定、Ａトレンチより現表土下25cmほどに地山面を検出、並びに遺構の存在が確認される。それを受けて午後、中部電力、県教委文化課、市教委埋文センターの三者により、埋蔵文化財保護及び発掘調査打ち合せ協議に基づき、そのまま本調査に移行することに決定。

Ａトレンチの調査範囲を東側に拡張、検出面まで掘り下げ、その全体像を把握する。

10月８日（土）

前日発見された１号住居址東南方向の遺構存在の有無を確認する為、Ａトレンチを拡張検出に充てる。その結果、住居に隣接して土壙が存在することを確認。午後、住居南側部分の精査に入る。

10月11日（火）

ＳＢ１の精査継続。

10月12日（水）

昨日に続きＳＢ１の精査。併行してＳＢ１セクション実測。

10月14日（金）

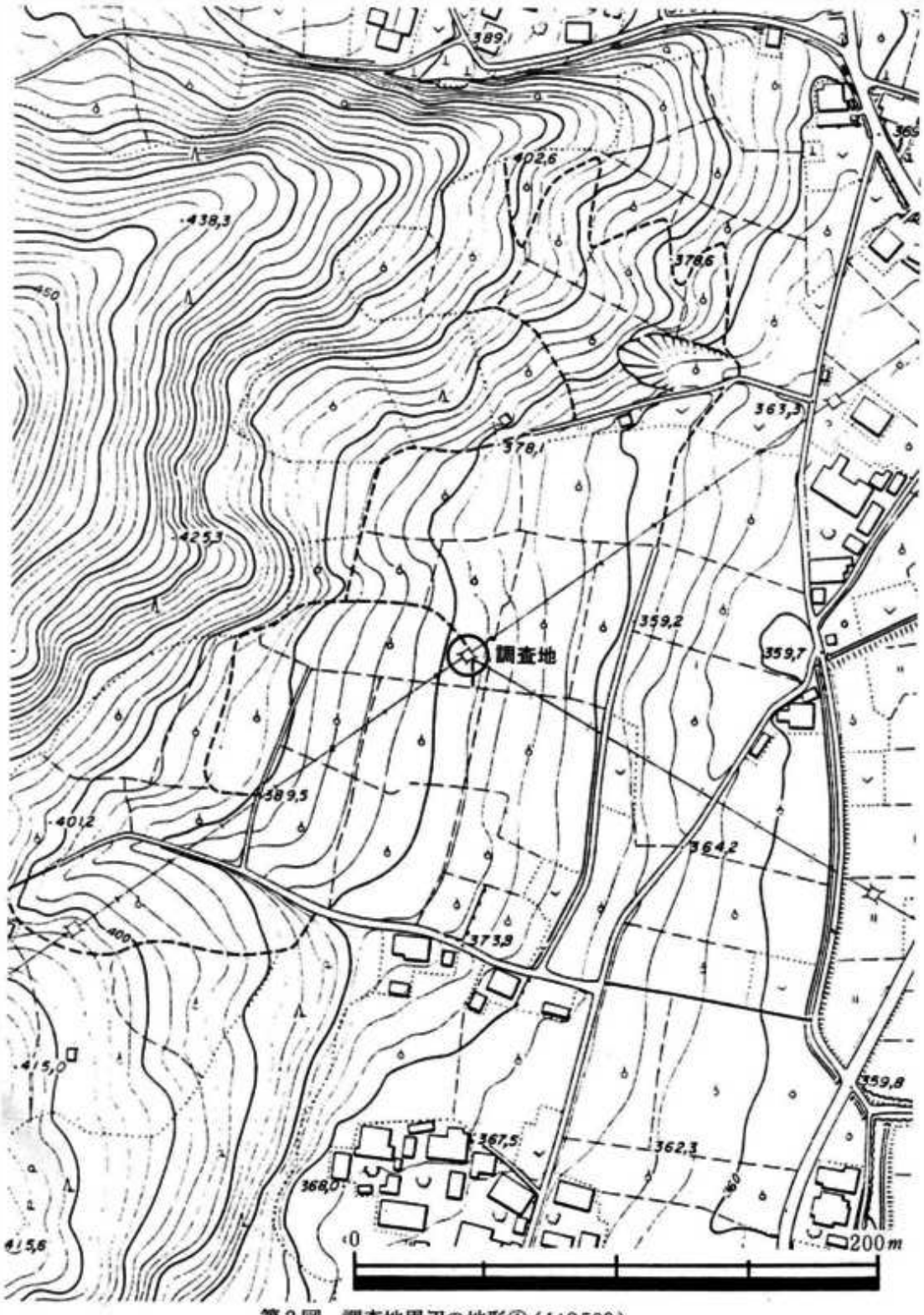
ＳＢ１、ＳＫ１精査終了。写真撮影。同時にＳＢ１及びＳＫ１土器出土状況微細実測、併せて全体遺構図作成。午後、鉄塔工事予定地内東南部にＣトレンチを、東部隅にＤトレンチを設置、観察の結果遺構は確認し得なかった。

10月17日（日）

午前中にて写真撮影、実測作業終了。

10月18日（火）

埋戻し作業。本日にて現場におけるすべての作業を完了。



第2図　調査地周辺の地形①（1:2500）

第４節　遺構の分布

調査地点は篠山の北東麓にあたり、四野宮から越地区に見られる小規模な崖錐や河岸段丘地形を発達させた急傾斜面の両地の中にあって、山峡の比較的平坦な斜面を選んで占地している。

また、東方に仰視すること比高差25mを以て、豁然と石川条里を臨み、後背湿地を隔てて塩崎遺跡群の集落が立地した千曲川の自然堤防へと移化する。

現在では、丘陵部と千曲川氾濫原という地形上の明瞭なる境界は、土地利用の上でも果樹園と水田耕作という異なった地目の活用が窺えるのである。それは前代より培った、地質構造、水利灌漑利用方法等と自然地形とを適確に見極めた、当地地形に適応する人間生活の知慮を垣間見ることができよう。

さて、今回の調査で確認された遺構は、Ａトレンチより検出された竪穴住居址１軒、及び土壙１基である。しかし、竪穴住居址も全容を解明出来たものではなく、また遺物量も決して多くはなかった。また、他のトレンチからの遺構は確認されなかった。これら当該調査における成果、及び昭和63年度に長野県埋蔵文化財センターによって調査された同地籍南方に展開する集落址は予想外の集落規模をもった遺跡であり、またその立地の上からも塩崎沖積地を巡る古代の空間構造把握において看過せざるものである。

以下、検出された遺構・遺物について説明を述べることとする。

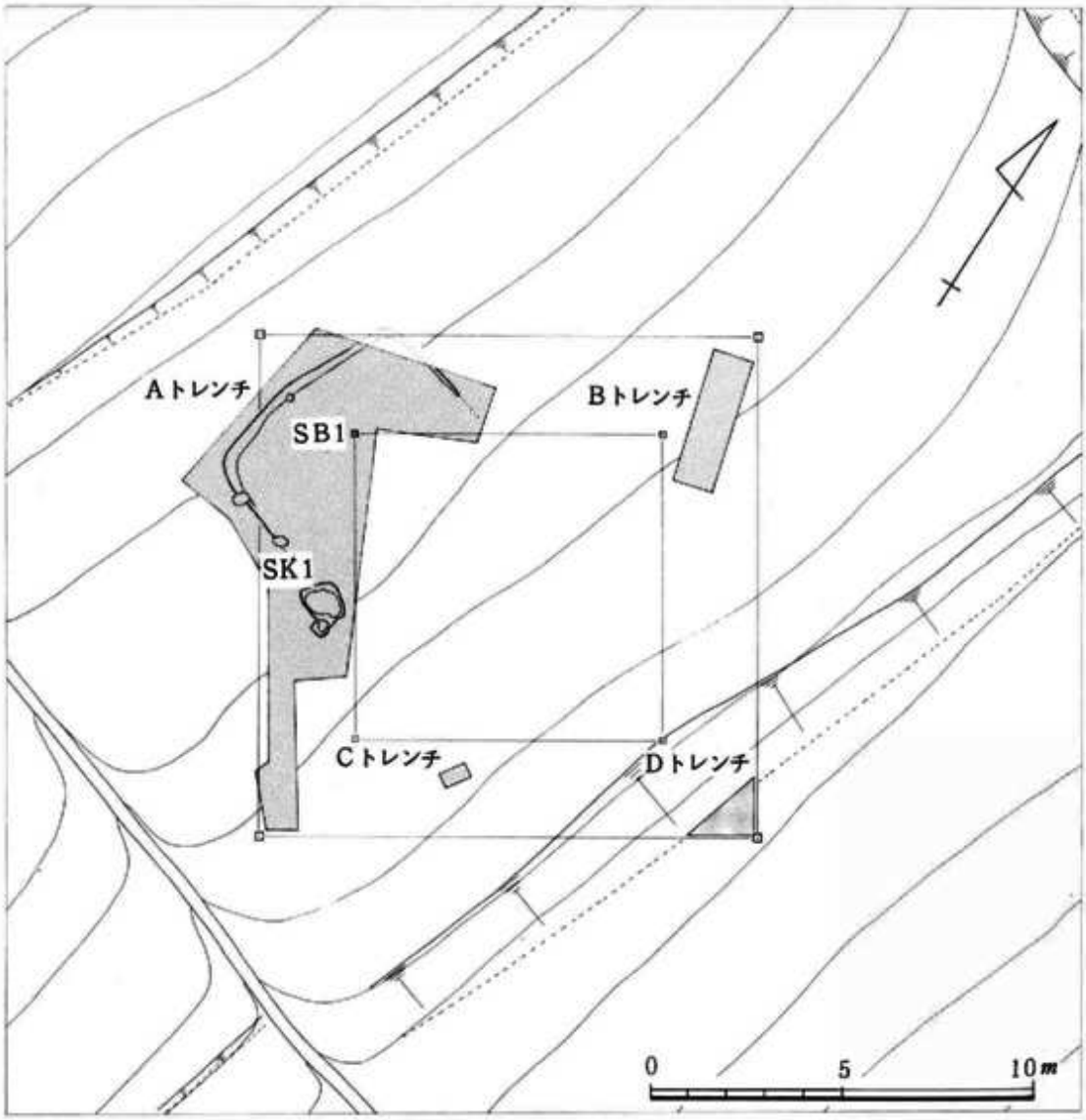
第５節　調査内容

１号住居址

遺構

調査地内西端、即ち既存鉄塔の山手側に位置する。表土面傾斜角11°の勾配下に、山側の掘り込みを深くすることにより床面を水平に穿って住居を構築している。主軸方向はＮ17°Ｅで、一辺6.1mの方形を呈するものと思われるが、東半床面及び東壁は検出するに至っていない。壁高は西壁に於いて36cmを測り、遺存している遺構は比較的堅固に踏み固められ、残存は良好である。

カマド等の施設は検出されていないが、焼土は２箇所において確認されている。住居中央部（焼土直径32cm、厚さ６cm）のものと、ピット５東半覆土中より（焼土直径60cm、厚さ25cm）炭化物と共に少量堆積されたものである。また調査所見より、当住居主柱穴は（P_1・P_3）の二箇所が思料され、加えて壁際直下に１m程の間隔で支柱穴に供したと思われる（P_2・P_5・P_4・P_6・P_{10}・P_{11}）ピットが配列されている。これら配置には厳然とした規格性は認められないようである。また本住居の特質として周溝の量とその配置上注目すべきものがある。山手に多くの周溝を用いていることより、排水処理機能の効用を狙いとする、斜面に住居を構えた人々の適応と解することが出きようか。斜面に立地する住居構造・成因を理解する上で今後追求すべき問題点を内包する。大方の御教示を受けたい。

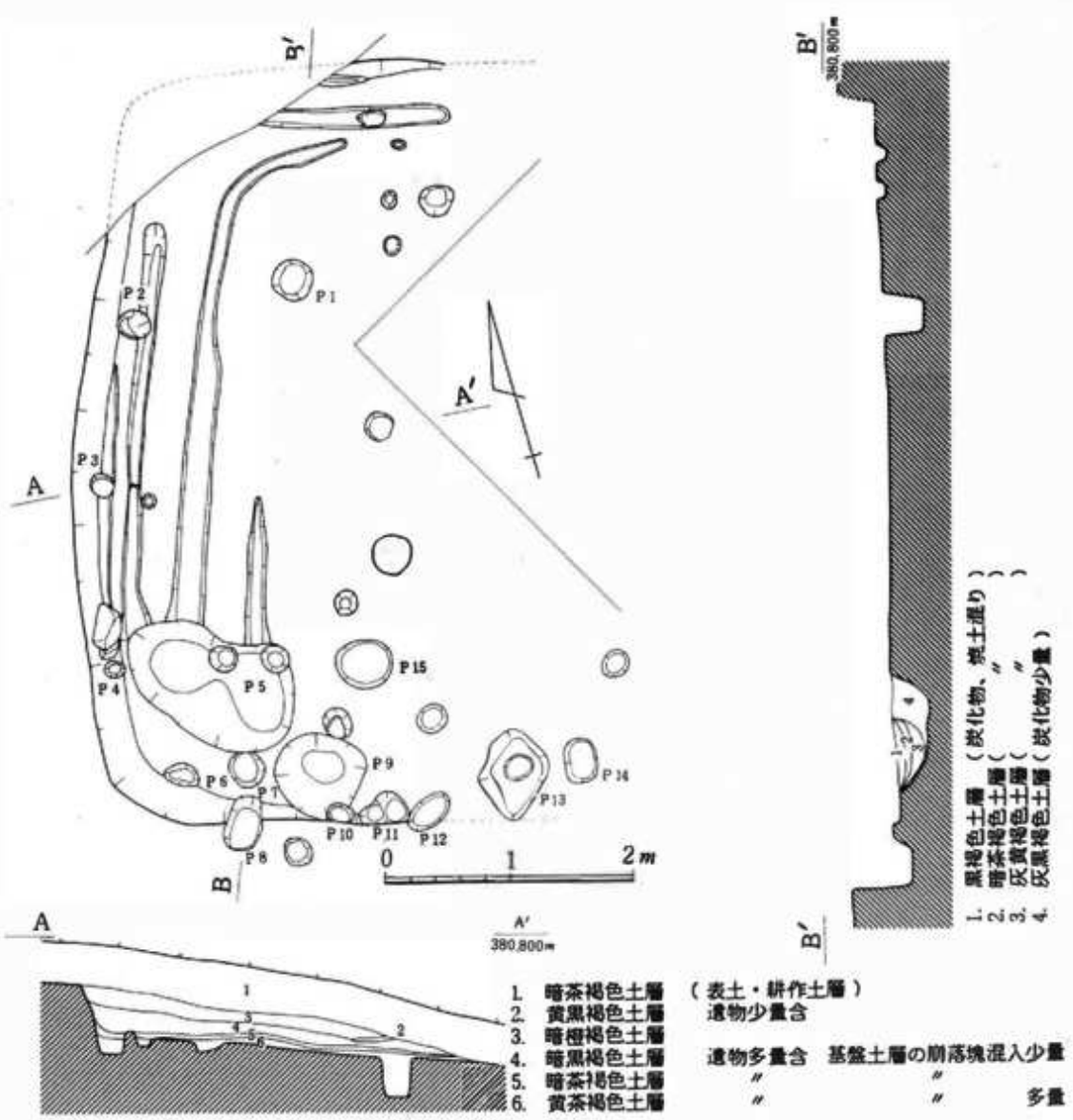


第3図　調査位置図及び周辺図（1:200）

1号住居址

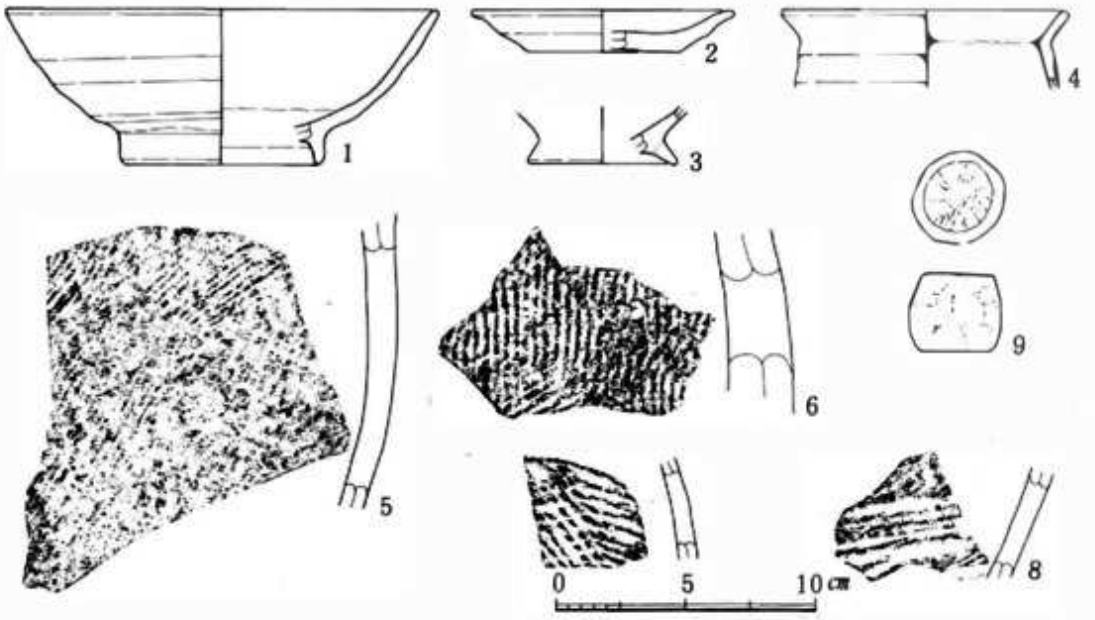
遺物

出土状態は覆土下層～床面にかけての出土が多く、その大半が小破片である。種別は土師器を中心に構成され、若干の灰釉陶器埦と須恵器甕が伴う。(1)は灰釉陶器埦である。灰釉は他に数個体分の破片が出土したが、図示できたものは該資料だけである。高台外面に丸みを帯び、外面胴部下半に箆削りがされる。釉は灰白色を呈し漬け掛けである。出土土器の9割以上を占める土師



第4図　1号住居址実測図

器は、その組成の大半を坏・皿によって構成され、甕類は拓影に示した(7X8)、及び小型の甕(4)等小量散見されるにすぎない。また小破片ではあるが羽釜の鍔部分が出土している。鍔はやや長く水平に伸び、断面に三角形を呈する。須恵器では唯一出土が確認された平行タタキ目をもつ大型甕片が(5X6)、1個体のみP1南側床面より出土している。ほぼ中央部の床面から石製品が出土した。胴部に緩やかな張りをもたして樽形をし、全面が研磨されている。胴部最大幅3.5cm、高さ3.0cmを測る。以上、土師器・灰釉陶器等の出土土器の様相から本住居址は、平安時代後半に位置付けられよう。



第5図　1号住居址出土土器実測図・拓影

表1　1号住居址出土土器観察表

番号	器形	法量(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調 ②残存 ③備考
1	塊－灰釉	6.0　16.6　7.4	覆土下層	裾部は丸みを帯び、施釉は漬け掛け	①灰白色 ②口縁部～胴下半1／5
2	皿－土師器	1.6　10.0　5.8	〃 中層	内外面回転横ナデ、底部回転糸切	①灰橙褐色 ②1／2 ③胎土砂粒を多く含む。
3	坏－土師器	－　－　5.8	〃 〃	内外面回転横ナデ。	①橙褐色 ②底部1／3
4	壺－土師器	11.0　－　－	〃 〃	内外面回転横ナデ。	①橙褐色 ②口縁1／5
9	石製品	3.0　2.65　2.8	〃 下層	楕形を呈す。上面に打痕、後に全面研磨されている。安山岩	①暗灰色 ②完形 ③軟石か？

1号土壙

遺構

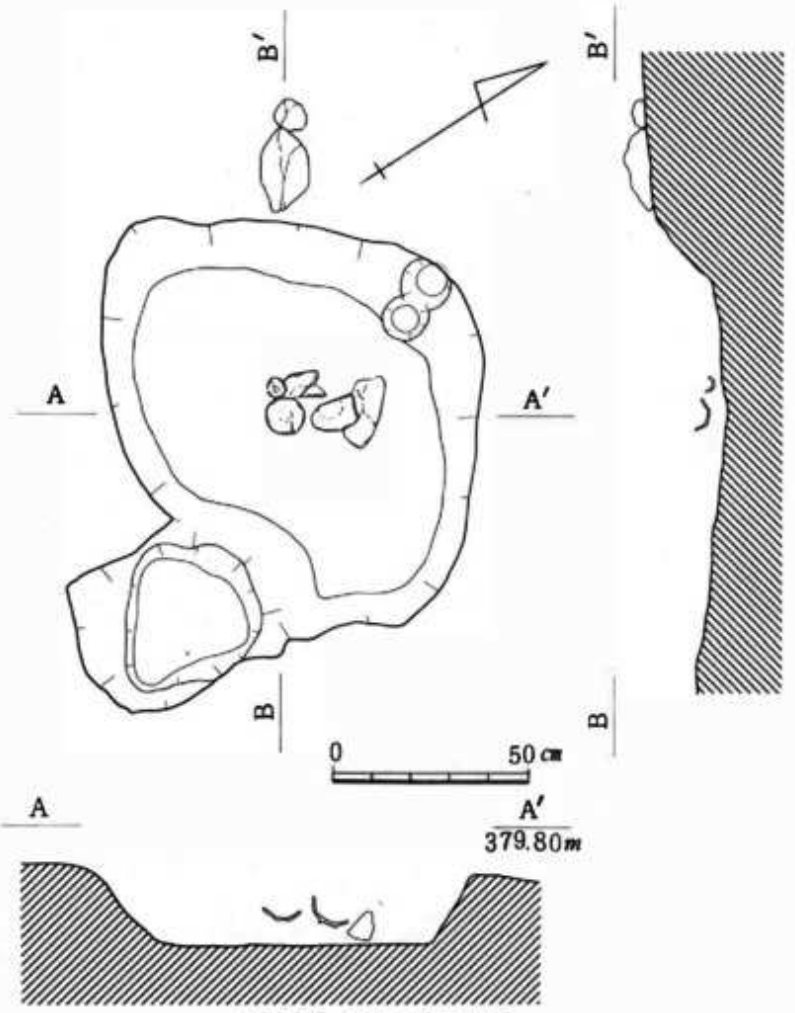
1号住居址南側に隣接して検出されたもので、規模は南北0.95m、東西1.08m、壁高22cmを有する不整の隅丸方形を呈する。また南側に直径27cmの柱穴が確認された。床面は山側を深く穿って、水平を意識し構築される。覆土は黒褐色土層で自然堆積と思考される。遺物は、遺構中央部より灰釉陶器塊を含む5個体分の土器片が1ヶ所に集束した状態で納められていた。

遺物

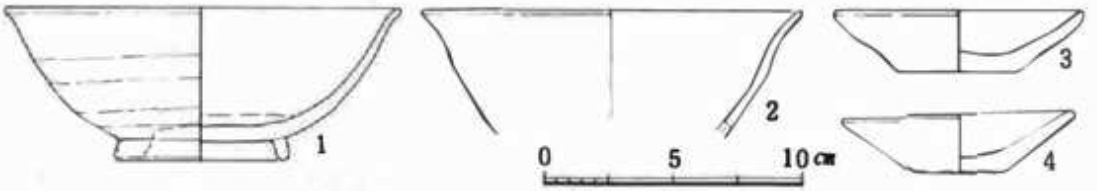
土壙中央部床面より一括出土した5個体の土器の他は、微量の破片が覆土下半より出土しただけである。種別は土師器・灰釉陶器である。一括出土した5個体の内訳を見ると、土師器皿形土器3個体、坏1個体、灰釉陶器塊1個体となる。その内土師器皿1個体が著しく摩耗を受け、破砕してしまって図化できなかったが、同時に出土した皿形土器(3)(4)に近似したものである。

(1)は灰釉陶器塊である。口縁部が僅かに外反し、胴下半において箆削りが施される。底部は回転糸切の後、雑なナデが加えられる。漬け掛けによる施釉である。(3)(4)は土師器皿でロクロにより整形され、底部は回転糸切により切り離しが行なわれている。

出土土器の様相より、1号住居址と同時期もしくは、若干新しく比定されよう。



第6図　1号土壙実測図



第7図　1号土壙出土土器実測図

表2　1号土壙出土土器観察表

番号	器形	法量(cm) 器高	口径	底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調 ②残存 ③備考
1	塊－灰釉	5.9	15.2	6.6	覆土下層	底部に回転糸切痕を残し、施釉は漬け掛け。	①灰白色 ②口縁部～胴下半 1/2
2	杯－土師器	－	12.4	－	床面	内外面 回転横ナデ	①橙褐色 ②口縁部～胴部 1/6
3	皿－土師器	2.4	9.4	4.6	覆土下層	内外面 回転横ナデ、底部回転糸切	①明橙褐色 ②完形
4	皿－土師器	2.3	9.0	3.4	〃 〃	内外面 回転横ナデ、後にナデ。底部回転 糸切、後にナデ。	①淡橙褐色 ②2/3 ③粘土に砂粒を多く含む。

第6節　小結

今回の調査は、千曲川が形成した自然堤防上に集落を営んだ塩崎遺跡群、対してその後背湿地と考えられる地に築かれた生産母胎である石川条里遺跡を開鑿する、背後の鶴前地籍丘陵緩斜面上に位置した、中部電力送電用鉄塔建設に伴って行われた発掘調査である。

もともと調査地周辺は、県史遺跡台帳より周知され、更に本調査に先立つ昭和63年度の中央道長野線調査箇所の一部が同一丘陵上に集落遺跡発見の成果を得たことより、今回の調査においても遺跡の存在は予想されていたのである。

今回の成果については、調査面積が限定されていたこともあって、集落跡の全貌を窺える発掘ではなかったために、集落構造への関心を深めつつも、個別住居址の検証に留めざるをえず、また、既設された鉄塔の為、攪乱を受け、器種組成把握の上でも些か心許無いまま調査を終了したのは残念であった。具体的には、平安時代住居址1軒、及び土壙1基が確認され、出土土器の上から灰釉陶器の搬入増加に伴った、土師器が粗雑化し衰退の段階に位置付けられる。

土師器坏は、内面が箆磨き調整、黒色処理を施されたものはなく、皿もロクロ水引きによる底部無調整という簡略化されたものである。甕類では、平行タタキ目を持つ土師器、須恵器甕が僅かに散見され、須恵器にいたっては坏の出土は確認されなかった。また小破片ではあるが、新相に由来する羽釜が組成に加わっている。灰釉陶器は、漬け掛けにより施釉されており、美濃窯における大原Ⅱ号窯式に比定して大過無いものと考えられ、その実年代については、最近の研究成果より、多少議論が分かれるところであるが、概ね10世紀代前半と位置付けられようか。また1号土壙においては、灰釉陶器の型式学的検討よりすれば、1号住居址のものより若干後出のものと考えられよう。

鶴前遺跡の所在地域は古代において更級郡に属していたことは、改めて述べるまでもないが、信濃において最多の郷を擁した当郡にあって、当地籍は小谷郷に該当するとされ、後に庄園化し四宮庄に領有されたと考えられる。また、その生産母胎と想定される石川条里遺構は、出土土器の編年検討より敷設年代を10世紀前後と推定されるが、それを囲繞するように、北方に上石川廃寺を中心に後に石川庄が、対峙する塩崎地区には四宮庄が営まれ、俄に平安時代遺跡数の増加が見られ、開発が著しかったことが知られる。その状況下において、本調査地が位置する東部丘陵上における集落の規模、成因、周囲の集落との関り合いなど、今後の課題となろう。また、当郡に所在するとされる亘理駅を含め、西方文化の東方への伝達路であった、「令制東山道」の検証も急がれるところである。

近年、塩崎地籍を巡る考古学的発掘調査は、その数に相乗して多大な成果を上げ、当地域に関わった原始以来連綿と続く人々の歴史的梗概が露呈されつつある。その反面、今回の調査事由も含め、道路建設、農業構造改善事業等に伴う埋蔵文化財の破壊が頻発しているのもまた事実であり、文末ながら看過出きない問題が内在していることを付言しておきたい。

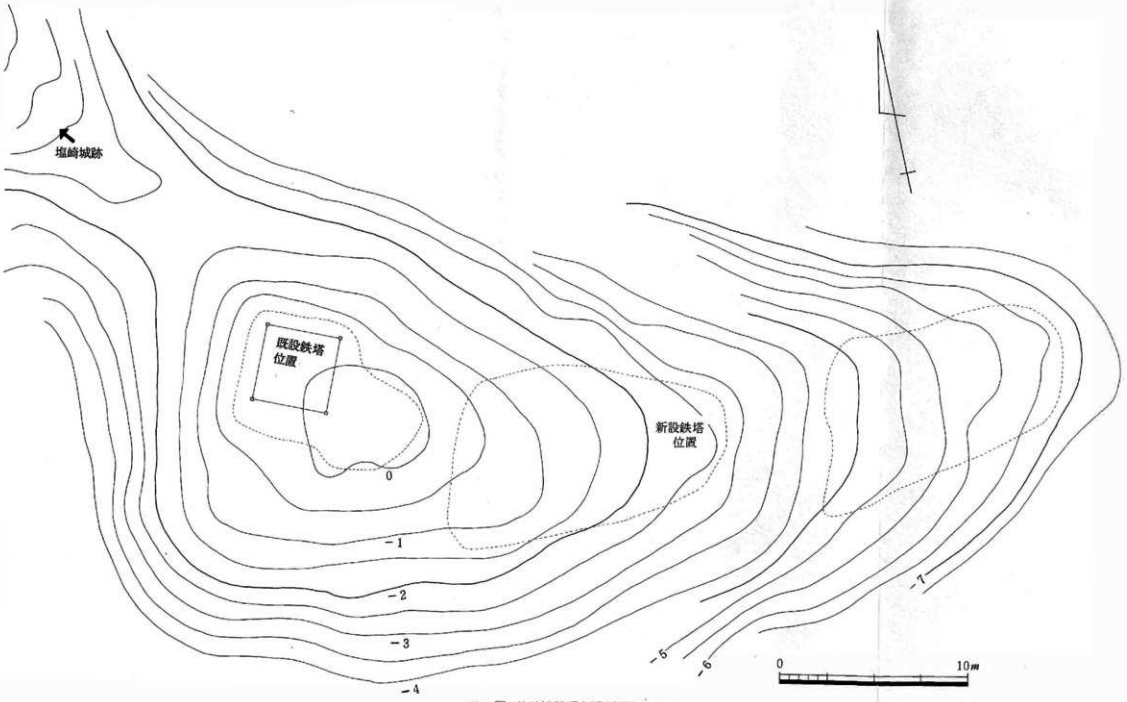
第４章　塩崎城跡

塩崎城跡は、長谷寺の西北標高 560mの山頂に位置し、五万長者城・白助城とも呼ばれている。山頂部の本郭を中心として、東方向の尾根づたいに10数段の郭が連なることが確認されているが、正式な測量が実施されておらず、その規模については不明な点が多い。鉄塔建設にともない今回調査を実施した部分は、城跡山頂より 100m下ったテラス部にあたり、標高は 480m前後をはかるものである。塩崎城跡の連郭からは大きくはずれた位置にあり、既設の鉄塔部分を最高所として東方向に標高を減じる独立丘となっている。傾斜にそって人為的な切り盛りを思わせるいくつかの段差を認められるが、この段差を遺構と考え、塩崎城跡とのかかわりを認めるか否か、意見の分かれるところであろう。ただし、正確な位置は不明ながら、長谷寺裏山で経筒の埋納が偶然に明らかになったこともあり、長谷寺背後の山頂部にあたる今回の調査地点には、塩崎城跡とも関連した何らかの遺構存在の可能性について留意すべき環境を備えている。

地形測量は、50cmコンター・1／100縮尺により、昭和63年９月28日から同30日まで実施された。測量図及び現地での地形観察によれば、頂部から東に向かい３段のテラス状平坦面の存在が明らかとなった。人為的な切り盛りによる造成の結果を示すものか、あるいは浸食による自然地形であるのか、地形測量の結果からは判断する根拠を得ていない。頂部は、既設の鉄塔建設により若干の地形改変を受けており、下方のテラスも土砂の流出が著しく岩盤が露出する部分が多い。ちなみに、調査地点は松の枯れ死により裸山に近い状態にあり、とくに尾根筋の土石の流失が著しいようである。

測量結果をふまえて、テラス部を中心として発掘調査位置を選定し、10月３日から５日にかけて試掘坑を掘削した。試掘坑は、鉄塔新設が予定される中段のテラス部に３か所、いずれも南北方向に尾根を横断する形で設定した。頂部は土石が流失しているため、基盤である岩盤層が半ば露出した状況にあるが、谷がわの両斜面では除々に凝灰岩風化土砂が堆積の厚さを増す傾向にある。堆積状態から基盤層を掘削しテラス面を造成した痕跡は認められず、テラス面の形成が岩盤層の部分的浸食に由来する可能性が強く感じられた。発掘による遺物の出土も皆無であり、鉄塔新設位置には遺構が存在しないものと判断して調査を終了とした。

今回の調査においては、発掘地点を中心とした山頂部に、いくつかのテラス状の平坦面を確認するに及んだが、発掘調査所見からは自然地形との区分が困難であるため、当該地を塩崎城跡に連関した遺構として把握することは留保せざるをえない。ただし、塩崎城直下にあって四方眺望の可能な位置を占めるこの山頂が、城郭施設の一部として利用されていた可能性はいまだに否定されない。また、先述したとおり、調査地の近隣に経塚が存在した可能性も指摘されるところであり、今後とも注意を必要とする地域に位置づけられよう。



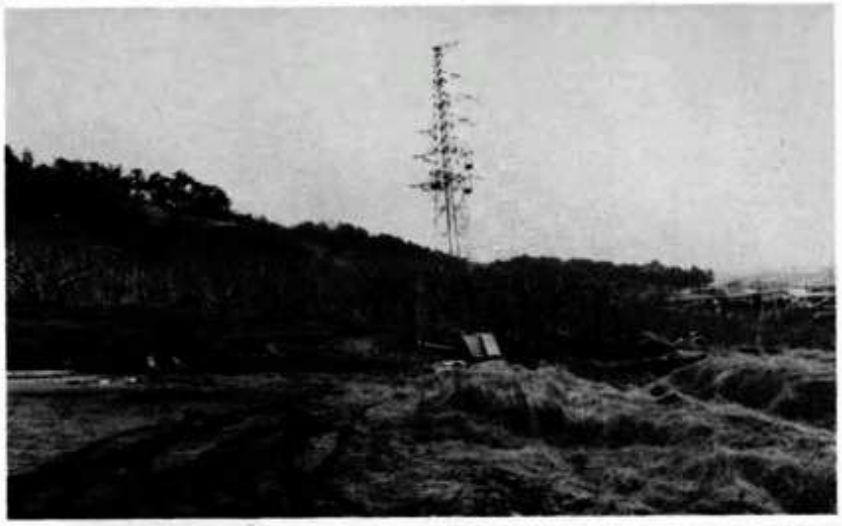
第９図　塩崎城跡調査区全測図（1:200）

第8図　調査地周辺の地形②（1:6000）

図　　版

図版1　鶴前遺跡

調査地(鉄塔直下)から
塩崎自然堤防、
正面、有明山山腹に
森将軍塚古墳を望む

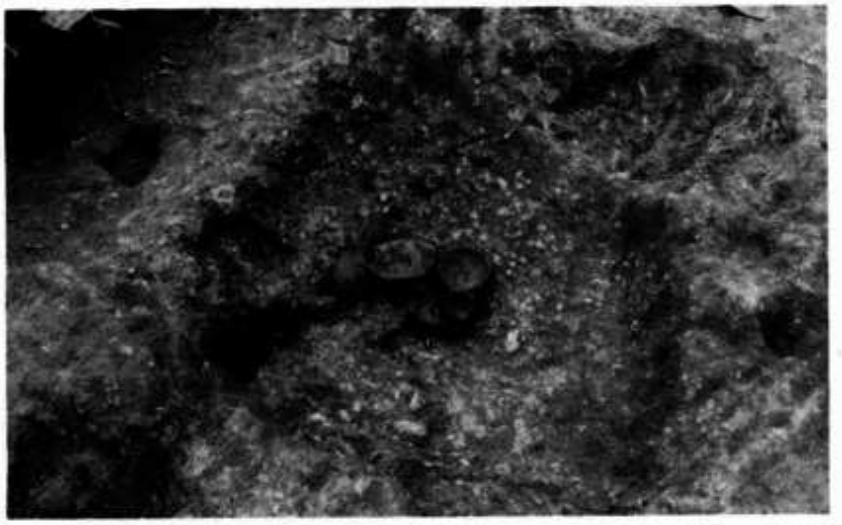


調査地近景

第1号住居址

図版2　鶴前遺跡

1号住居址内土壙
ピット5半截状況



1号土壙
遺物出土状況

1号土壙
遺物出土状況

図版3　塩崎城跡

塩崎城及び調査地点
遠景

調査地点近景

調査地点より塩崎新城
を望む

図版4　塩崎城跡

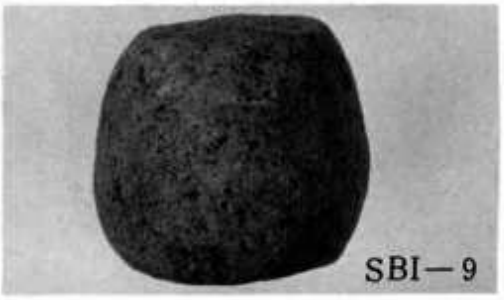
測量作業

検出作業

トレンチ内検出状況

図版5　試掘調査

仮設鉄塔工事
の立会い調査



鶴前遺跡出土遺物